

平成 21 年 3 月 19 日

各 位

鹿児島国際大学
教育開発センター長 南 新 秀 一

FD ニュースレターの送付について

拝啓

時下ご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、本学 FD ニュースレターを発行いたしましたので、ご送付いたします。ご高覧いただければ幸いに存じます。

なお、ご意見やご感想がございましたら下記連絡先までお寄せください。今後ともよろしくお願い申し上げます。

敬具

【連絡先】

鹿児島国際大学 教育開発センター
〒891-0197
鹿児島市坂之上 8-34-1
TEL : 099-263-0838
FAX : 099-263-0640
e-mail : kaihatsu@ofc.iuk.ac.jp
URL <http://www.iuk.ac.jp/~kaihatsu>



FD Newsletter

The International University of Kagoshima Center for Educational Development

2009.3
vol.5

教育開発センター通信



FDとキャリアデザイン

—教える内容の工夫—



鹿兒島国際大学学長
瀬地山 敏

I 学生たちの姿

1. 懸賞論文「わたくしにとっての『大学』とは」

わたくしたちの大学では、毎年学生の懸賞論文を募集し、その中からすぐれた論文に対し学長賞、入選作品を選んで表彰しています。応募論文は選考委員会が選考します。わたくしは選考に加わっていません。

今年の指定論題は「わたくしにとっての『大学』とは」でした。学長賞を含む4本の入選作品を簡単に紹介します。

2. 青年期の迷いと模索

Aさんは本学に進学できる状況ではなかった学生です。経済的な理由です。Aさんの境遇からすれば、「義務」という窮屈な視点からものごとを判断しがちです。したらいけない、せざるをえない、という思考の型です。進学も「したらいけない」ことだったでしょう。中国インターンシップから帰国した友人たちから、中国の大学生の考え方をききます。かれらの考え方が、

自分と違うことを知ります。おそらく義務という次元では考えられない、かれらの闊達な学習姿勢に啓発をうけたのでしょう。さらに決定的な思考・意識の変化が始まるのは、宇宿商店街のイベント参加です。2年生による企画に1年生として参加・体験するのですが、「人から言われて始めた活動だったため愛着がなく、責任もなかった」。しかし翌年の7月、2年生十数名で鹿兒島の大学生交流を目的にしたイベント（費用はスタッフ全員の投資）を、すべて自分たちだけの「責任」でやりおかせてから、大学という期間は、「責任」「自己責任」の意識をつくる場所と認知するようになりました。「義務」から「自己責任」の世界への飛躍。現在Aさんは中国インターンシップに行けなかったことについて、行ってはいけないという「義務」の視点からではなく、親に借金してでも行くべきであった、それは「自己責任」であると反省しています。

「国際なんて行きたくない!」。理由はふたつ。最大の理由は友人にバカにされる。もうひとつの理由は学費の問題。大学に行くとなると奨学金がどうしても必要だが、行きたくない大学

CONTENTS

P1~3 FDとキャリアデザイン

P4 Topic

P5 FDシンポジウム2008開催

P6~7 学部FD意見交換会を開催

P8 FD実践紹介

P9~10 FD研修参加報告

に行つて、数百万円の借金を自分で抱え込むという大矛盾。進学校卒でしかも前期・後期の国公立試験に失敗したB君が、直面しなければならなかった複雑な状況です。「大学は鏡だった」と今、4年生のかれは振り返ります。10社ほどの就職活動が失敗し、第2志望の企業の面接では気後れして、なにもいえなかった。しかし入学来の友人と長所・短所を相互に腹藏なく語る機会があつて、自分の力だけで生きているような傲慢さを指摘されます。その後第一希望の企業の最終面接に出かけ、内定を得ました。「鏡」には息子をほとんど無口で見守つた父の姿も鮮明に映っています。

もの静かな6000cc、あるいは文化の森をゆっくり逍遙する貴公子。写真はついていませんが、そう形容したいC君の論文でした。シェイクスピア論を受講して、『ハムレット』の劇中劇の仕組みに驚く。地域を知っていたつもりだったが、ほんとうは理解していなかった自分を講義で知る。これらの講義を聴いて、自分の内面に起こっていく変化。こうしてC君は、歩みを止めて折々の野の花に目を凝らす、そういう学生生活を送っているのでしょうか。大学入学、次は卒業・就職。このはじめとおわりだけに注目するのが社会の風潮ですが、かれはその間に経過する4年間の意義を語ります。「自らの来た道や行くべき、行きたい道を改めて見つめ直し・または脱線することのできる場」として。

DさんはC君のいう「経過する4年間」の意義を、せいたくにも2回享受しようとする学生です。1回目は単位をほとんど取らない大学生として、2回目は取らなければならない単位の多さに歓喜する再入学生として。取得しなければならない単位を多く残した、数年前の自分に感謝する。不思議な再入学生です。何が起こつたのでしょうか。退学中、1年4ヶ月語学留学した外国で、自分よりはるかに日本を理解している外国人の学生たちに出会つたのです。「日本を知らなかった日本代表」の6000ccに、惜しめない拍手を送ります。

3. 変化した社会環境と不変の「悩む力」

思うにどの大学で同じ指定論題の論文を募集しても、同じような学生の姿が見て取れると思います。それだけではありません。自分たちも若いときにはそうだった。教職員のほとんどがそう思つておられるにちがひありません。ひとことでいえば青年期の迷いと模索する姿。今も昔も変わらない姿ともいえるでしょう。

しかしその「悩む力」を引き出し、それに火を点けるのは容易なことではありません。なぜならば学生たちは、少子化・高齢化の年齢構成をひとつの特徴とする成熟社会に生い育つて来ているからです。またわたくしたちですらおぼろげな像しかもちえない将来を、かれらは青年として生きていかねばならないからです。

少子化と大学のユニバーサル化の関係はよく注目されていますが、成熟社会であるという点もそれにおとらず重要です。中国の一人っ子政策が大学のユニバーサル化を生まないのは、中国が高度成長期のかつての日本のように、速い発展を続けている社会であることを忘れてはなりません。応募論文で学生のひとりが気づいたように、中国の学生たちは一般に積極的な学習意欲を持っています。しかし日本は成熟社会であるがゆえに、学生たちの「悩む力」、「模索する力」を引き出し、それに点火することは、むずかしくなっています。過去のわたくしたち教職員の学生像にひきつけて、現代の学生を考えることは問題の解決につながらない、そう考えねばならない時代である。教育あるいはFDの課題は、成熟した社会で成長し成長しつづける学生たちのところを動かすことにある、といえるでしょう。

II 授業公開から始まった本学のFD

1. 全学授業公開と教員相互の啓発・学習

FDつまり「教える力の開発」は4年前に、22名の教員の授業を公開して相互に「教える力」を模索する形で始めました。「パイロット授業」と呼んでいました。全学授業公開の方向を探る実験的な試みです。「パイロット授業」は次の年非常勤講師による授業を含めて、「全学授業公開」に進みました。全学の授業を公開するといっても、公開している授業すべてに、教員が参観して学習するということは現実的には不可能です。教育開発センターを作り、公開する授業を指定しながら、ミニ学習会、学生も参加する授業改善の全学シンポジウムなどをくりかえし行つてきています。

学生の授業評価および教員相互の啓発・学習の成果として経年的なシラバス改善など、一定の成果を見たと思っています。なによりも教員の間に、FD意識が形成されたことはまちがひありません。

2. 教育プログラムとしての授業の整備

この段階までの「教える力の開発」は、個別の授業を対象とするものでした。しかし個別の授業の総体、つまりカリキュラムが「教える力」、「考える力」の上昇に結びついているか。この問いかけは個別の授業改善におとらず重要です。学部・学科のカリキュラムを検討してみると、(1)見かけ上はコースつまりプログラム化されているように見えるが、選択可能な科目が多すぎて骨格が見えない、(2)共通教育科目である語学をみると、単位として登録されている科目が多くて、その言語の読む・話す・書く能力が、それを履修して保証されるようになっていないことに気づきます。開設科目の混雑現象です。

教える側にとつても、学習する側にとつても、道がみえることはきわめてたいせつです。コースとしての教育プログラムが見えるようにする(コース専門科目のスリム化)。この1年かけて整備しました。共通教育科目とりわけ語学については引き続き努力が必要です。目標は少なくとも1ヶ国語について読み・書き・話せる力の養成が不可欠です。語学の整備は教育プログラムの次の課題です。

コースを骨格として整備する。そうすると見えてくる次なる課題は、コースとしての教育の達成度です。またコースを構成する科目についても、コースの目的に合わせたそれぞれの達成目標が、学生たちが自分の理解度をチェックできるように、シラバスを設計しなければなりません。教育開発センターと教務課による研究をもとに、学科会議など全学的な検討がほぼ終わりました。来年からの実施に向けてシラバスの作成作業が始まります。

3. 入学前教育(ウォーミングアップ学習)の導入

大学全入時代といわれます。AO入試、推薦入試の学生が半数を占める時代です。こうして大学は伝統校、新興の学校、進学校、実業系の学校、単位制の学校、大学入学資格検定試験合格者など、基礎学力にかなりの開きがある学生が入学することになります。教育上問題になるのは、入学者全員の基礎学力です。そのためにAO入試、推薦入試の合格者を対象に、英文と日本語の読み書きを添削指導する入学前教育を始めています。webも利用して行っています。

出題は英文・日本語の読み・書きの授業を担当している教員2名が作成します。英語の場合、出題担当の教員は英語教育の現場から学んだ二つのポイント、(1)動詞を発見する(2)字引を引く習慣をつける、という学習法で、英文の理解力を高める出題

をしています。また日本文の出題教員は、(1)読めない漢字に出会うと飛ばして読む(字引を引かない)、(2)中学・高校時代に学生たちが嫌いだっただけの「読書感想文」である、という講義(「文章表現法」)でえた体験をもとに、出題を設計しています。

そして添削は教員全員が行っています。効果が期待できない、仕事が増える。不満の教員もいました。しかし不満な教員が添削に熱心なこともありました。基礎学力が低下するのを現実に体験している教職員が、危機意識を持って参加したのだと考えています。参加した学生のアンケート調査によれば、この添削指導を評価する意見が多いです。訪問する高校の教員の評価もよい。新入生ゼミでこれまで覆面のお付き合いだった教員と高校生が、素顔で対面するという親しさもあつたとききます。高校生の入学前の力を引き上げることと、高校生の実態を認識する調査にもなることから、今年も行っています。昨年より高い8割台の回答があり、継続して添削指導を受けています。成果を見守りたいとおもいます。

Ⅲ キャリアデザインとしてみる大学教育

1. 大学におけるセーの法則

教員は開講科目をふやせば、それが教育の充実になると考えていないか。経済学にセーの法則と呼ばれる法則があります。「供給は需要をつくりだす」という法則です。この法則は1930年代、供給は需要によって決まるというケインズの理論によって否定されました。この喩えでいえば、大学は依然としてセーの法則に立脚しているように見える。需要の側を考慮しない供給優先・供給過剰の教育ではないか。

教育と同じような現象が進路支援活動にも起こっています。進路支援活動の中心は進路支援センターですが、それ以外に、生涯学習センターの資格講座、学部・学科はYESプログラムという具合に広がっています。ある意味で進路支援活動は強化されているようですが、学生の目から見れば、授業の場合と同じく「混雑」している感じです。それぞれが並立して行われています。安易な外注によって支援が行われる場合もある。こう考えていくと進路支援もまたシステムとして設計する必要があるのではないかと。そう考えて昨年4月キャリアデザイン室をつくりました。教員1名、職員2名の小さな部署ですが、CDA(Career Development Adviser)の資格を持つ職員が学生のカウンセリングも行っています。またYESプログラムの充実に取り組んでいます。さらに学生たちが進路の模索を自分で行う手助けに、「キャリアデザイン手帳」を作成中で、4月に配布される予定です。

2. 高齢化・少子化した成熟社会の困難

わたくしたちの社会環境は変わりました。80年代のバブルとその崩壊、「就職氷河期」、「失われた10年」、「いざなぎ景気」、それから米国のサブ・プライム金融市場を発端に始まった現在の大不況—この時代を通じて進行している、(景気の循環とは異なる)二つの構造的変化に注目する必要があります。ひとつは社会の階層分化が進行していることです。ひとつの階層から次の階層へ上昇することは、困難になってきています。さらにこの階層分化の進行に対応して、進学する高校・大学の階層分化が進行しています。ふたつめの構造的変化は、口に糊するために「働く」ことにたいする熱意・関心が、どの世代でも希薄になっていることです。暮らしのための仕事より、「余暇」、「生きがい」への関心がたかまっています。その評価をここで言うことはできませんが、とにかく仕事をしなければ生きていけない、という社会とは違った価値の見方です。こうして就職を先送りするころの状態が生まれ、それをある程度許容できる「豊かさ」

が享受されているのです。たとえばパラサイト・シングルがそのひとつです。

教員および職員が大学生活を送った時代と、現在の高校生・大学生がおかれている状況とは異なっていることを、わたくしたちはしっかりと認識しなければなりません。そうしなければ、先に指摘したセーの法則の誤謬はいつそう深刻になります。構造変化を予感・予知している青年たちと、それに気付かない教員・職員のギャップあるいはミスマッチが広がるからです。

3. キャリアデザイン教育の内在一つひとつの提案

キャリアデザイン室はYESプログラムの授業科目のうち、「文章表現法」だけでなく、「仕事と人生」、「ビジネス実務」も外部の講師にまかせることなく、本学の教員が担当するように努力しています。この努力は正しい方向だと考えます。なぜならば教員は特定の研究と教育の領域(実務)における仕事人だからです。同じ意味で職員もまたプロフェッショナルであるといえます。したがって教員は「仕事と人生」、「ビジネス実務」について、他の分野の講師ではできない経験の意義と意味を、自分の失敗を含めて、話しかけることが可能なはずで

キャリアデザイン教育は通常、卒業して就職するための学習と考えられますが、生涯にわたる仕事およびその他の活動への関心を開く教育・学習です。中学校・高校・大学を卒業後就職して3年以内に離職する割合が、それぞれ7・5・3割であるといわれます。早期離職の傾向です。これも成熟社会の現象です。より生きがいのある活動の場を求め、積極的な行動であるともいえますが、その結果が成功だったのか、不成功だったのか、しっかりした知識をわたくしたちは持っていません。ともあれ、生涯にわたる生き方について、キャリアデザイン教育・学習の視野を広げる必要があるのではないのでしょうか。

このように考えると、研究・教育のプロである教員でも、というよりそういうプロだからこそ、工夫をすれば、「通常の講義」の中でもすぐれたキャリアデザイン教育ができるように思います。

どの研究分野にも研究の歴史と現在があります。この広い背景から、キャリアデザインに役立つ情景を選び出す。すなわち個人(その時代の研究者も含まれます)が、家庭・企業・その他の活動団体など、いわゆる社会とかわる多様な相を伝えることです。講義の中のインターミッションとして、あるいは15回の講義の1回をインターミッションとして講義すれば、理系・文系の講義にかかわらず、立派にキャリアデザインの題材を提供できるはずで

研究者だからできる、「仕事と人生」へのもうひとつの気づかせ方ではないのでしょうか。講義がむずかしい、あるいはつまらないと学生たちがいうとき、講義の背後に本来は存在する「仕事と人生」に気づいていないことに、わたくしたちは気づいていません。若い「悩む力」にこうした旅をさせることが大切だと考えます。

注 この文章は教育学術充実協議会(私大協、平成20年12月2日)でのプレゼンテーションをまとめたものである。また1の2および3は本学広報紙「みなみ風」に掲載された。

注) 6000cc: 青年の潜在能力は、排気量6000ccの自動車のエンジンにたとえられる。これをいま駆動しなければエンジン能力は低下して、あとでは取り戻せない。このエンジンに点火するのが目標。

TOPIC 「よき学習者」をつくる——「ヒント集」の挑戦

教育開発センター長 南新 秀一

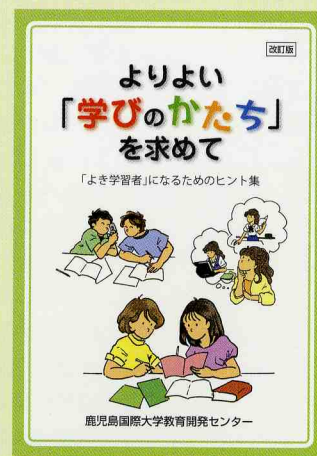
今年度初めに、私たちのセンターでは、本学では初めての試みとして、授業改善のための学生向け啓発資料「よりよい『学びのかたち』」を求めて——「よき学習者」になるためのヒント集（通称「ヒント集」）を作成しました。授業は教員と学生とが共同で作るものですから、それをよりよいものにしていくためには、教員側だけの努力では限界があります。学生の学びへの意欲を喚起し、学生たちから授業改善のための協力を得やすい環境を醸成していくためのささやかな一助として企画したもので、「10のヒント」というかたちで「よりよい学び」のための提案をまとめた小冊子です。

この冊子が実際にどのように活用されたのか、またこの冊子をよりよいものにするためにどのような改訂を加えたらよいのかを知るために、授業でこの冊子を活用して下さった先生方にアンケートを実施しました。「新入生ゼミナール」の担当の先生方からは、「参考にして具体的に説明した」、「机上に常に置き、繰り返し読んで参考にするように伝えた」、「1ページずつ説明しながら輪読した」などの回答が多く寄せられ、この冊子を用いて大学で勉強する意味などについて考えさせる授業に取り組んで下さったことがわかりました。レポートの書き方や口頭報告の仕方などの具体的な学習や研究の方法に加えて、学びへの意欲を喚起することを初年次教育の課題として重視なさっている先生方が増えていること、つまり学習意欲に欠ける入学生が少なくなると認識している先生方が増えていることがうかがえます。

冊子をよりよいものにするための提案も寄せられました。新たに付け加えるべき内容として、「自学自習を勧める項目」や「高校までの生徒とは違う大学生としての自覚を求める項目」は重要です。改訂版では、何らかのかたちで取り入れたいと思います。また、「〈知的冒険〉や〈知的に遊ぼう！〉といったテーマで大学が〈知的遊戯空間〉であることが示唆できればいいなあと思います」という提案には、はっとさせられました。私たちはともすれば学習を、単位取得のため、卒業のため、将来のためなど、もっぱら手段として

捉えがちですが、学ぶことそのものが本来は楽しくてワクワクするような経験でありうるし、ぜひそうであってほしいのです。そのような思いも学生たちに伝わるようなヒント集にしていきたいと思います。

近年、「ティーチングからラーニングへ」とか「学生の主体的な学び」が一種のはやり言葉のようにになっている観があります。もちろんティーチングなくして主体的で深い学習経験（ラーニング）がひとりだけで生まれてくるはずがありませんから、これらのフレーズを字面だけで理解することは危険です。しかし、ティーチングが知識や技能の伝達で留まるのではなく、それがよき刺激となって学生を主体的な学習（ラーニング）へと向かわせるようなものであれば、それこそが大学における理想的なティーチングのあり方だと言えます。教員と学生とがこの「ヒント集」を媒介にして対話することが、学生にとっては「学び」の意味と楽しさについて考える機会となり、教員にとっては自分の「ティーチング」のあり方を省みる機会となることを願っています。そして、それらのことが、新入生ゼミの内容を豊かにする基礎となり、初年次教育を充実する契機になることを希望するものです。



FD関連図書紹介



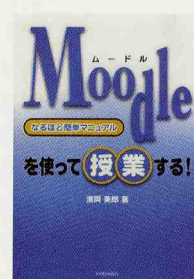
変貌する日本の大学教授職
有本章 編著
玉川大学出版部
2008年11月



学生と変える大学教育
—FDを楽しむという発想—
清水亮・橋本勝・松本美奈 編著
ナカニシヤ出版
2009年2月



初年次教育ハンドブック
—学生を「成功」に導くために—
M. Lee Upcraft, John N. Gardner, Betsy O. Barefoot (著) 山田礼子 (監訳) 丸善 (株)
2007年7月



Moodleを使って授業する!
—なるほど簡単マニュアル—
濱岡美郎 著
海文堂出版
2008年9月

企画報告 1 FDシンポジウム2008が開催される

—留学生の学習環境を考える—

日時：平成20年12月10日 16時～
 報告：葛欣然(大学院国際文化研究科博士前期課程1年)
 蘇慧慧(国際文化学部2年)
 祖恩厚(経済学部3年)
 佐野正彦(教育開発センター副センター長)
 今村憲一(学生部学生課留学生係長)
 司会：戦慶勝(国際文化学部教授)

今回のFDシンポジウムは、留学生の増加をうけ、留学生教育について問題提起を行うことが趣旨である。パネラーは留学生より3名(大学院生より葛欣然さん、学部学生より蘇慧慧さん、祖恩厚さん)、教員より佐野教育センター副センター長、事務職員より学生課留学生係今村係長、コーディネーターは戦慶勝国際文化学部教授にお願いして、①日本語教育、②来日初期の支援、③日本人学生との交流、④生活支援の4つの課題に沿ってディスカッションを行った。参加はパネリストも含めて教員38名、事務職員17名、留学生や龍志会会員の学生など学生18名、非常勤講師1名の、合わせて76名であった。

ディスカッションでは、まず日本語教育について、日本語の授業をもっと充実してほしいという要望が出され、留学生の間に日本語をしっかりと学びたいという要求が強いことが示された。これにたいして現状の留学生対象の日本語に関する授業は、あるにはあるが数は多くなく、また国際文化学部に限られている。正規のカリキュラムとは別に、留学生向けの日本語口座が毎週水曜4・5限に行われているが、基本的に授業のない時間帯であるだけに、留学生はこの時間にアルバイトを入れる(昨年行ったアンケートによれば週20時間以上アルバイトをしている留学生は、回答者の約6割に達している)などして、参加は少ない。ここには、留学生全体を対象とする明確な目標をもった組織的指導・支援体制の必要性が浮き彫りにされているように思われる。

来日初期の支援については、オリエンテーションや日本での日常生活開始に関わる支援が、中心的な話題になった。留学生は来日時時点で日本語の不安や日本での生活についての不安があるだけでなく、一人一人、能力や個性にかなりの差がある。したがって来日時から日本人が留学生と接点をしっかりとって支援することが重要だという点が指摘され、学生チューターや担任の教員、相談窓口となる事務職員の体制強化などが話題にのぼった。

留学生の間で日本語習得のレベル差が大きく、来日以来3カ月から6カ月で能力差がたいへん顕著になるという指摘もされ、継続

性のある初期支援の重要性を示唆している。また支援の主体として、現在はボランティアな国際交流サークルである龍志会に協力をおおぐことが多いが、大学としての組織的対応が根本であることも議論された。

日本人学生との交流については、留学生のパネラーより、多様な希望と要望が出された。主なものを拾ってみると次のようなものである。たくさんの日本人と交流がしたいし、日本の家庭にも泊ってみたい。留学生と日本人の双方の交流が必要で、日本を知るだけでなく、母国の紹介もしたい。留学生が参加できる催しが、鹿児島でたくさん行われているが、本学で情報を得るのが難しいので、情報提供を強めて欲しい。また本学での行事も増やしてほしい。

生活支援については、悩みを相談する受け皿がはっきりしないとの不満が出された。現状は、窓口はあるのだが、日常的に気軽に出かけていって話をする場となっていないことが、不満の中身であるように思われる(前記アンケートによると、留学生は、悩みの解決方法の4割以上が「留学生に相談する」という現状にある)。また留学生の日本国内での就職について、支援が弱いことも指摘された。留学生の多くが、留学後の進路として、日本での就職にメリットを見出している点に照らして、重要な指摘である。

以上が、きわめて不十分なものではあるが、シンポジウムにおけるディスカッションの概要である。留学生教育体制を整備していくうえで、たいへん多くの有益な指摘があったと評価してよいものと思われる(詳しくは今年度FD活動報告書などにお知らせしますので、ぜひ目を通してください)。また指摘のなかには、すぐに実行できる事柄がたくさんあり、関係する部署で対応を急いでいると聞く。この点を含め、今後の取り組みに期待したい。

なお、文中で留学生にたいするアンケートについて言及したが、この取り組みもまた、今後継続して力を入れていくべき分野である。シンポジウムでとりあげた4つの課題は、このアンケートの結果にもとづいている。最後にもうひとつ、このアンケートの結果にもとづいて指摘しておくべきことがある。留学生の間には、日本語の習得や勉強について、かなり高い要求と意識をもっていながら、実践する道筋がはっきりしないために成果が十分に得られていない人々が、相当な厚みをもって存在している。彼らにたいする支援をどのように行っていくかを、われわれはしっかり問題意識をもっておく必要がある。

教育開発センター員 加藤 一弘(経済学部准教授)



企画報告 2 学部FD意見交換会を開催

経済学部FD意見交換会報告

開催日：2008年12月17日(水)

テーマ：「**新入生ゼミナールをはじめとする初年次教育**」

経済学部FD意見交換会が、上の日時とテーマで行われた。テーマをこのように定めたのは、

- ①この間全学で共通教育のあり方が検討されてきているが、そのなかで新入生ゼミナールが大きな柱となっている。スタート以来、試行錯誤の経済学部新入生ゼミナールだが、これまでこれといって、学部として振り返ってみたことはない。振り返ってみる良い機会ではないか。
- ②経済学部では、初年次教育の柱として新入生ゼミナールを取り組んできたが、最近これ以外にも、初年次教育ないしそれに準じるものの取り組みが増えてきた。新入生ゼミナールでの経験を出発点に、今後の発展方向を考えてみる時期がやってきたのではないか。

という問題意識から発している。もっともどちらにしても大変大きなテーマであり、はっきりとした論点をこの場で得るということは、そもそも不可能である。ともかくも教員間・学科間の交流はやっておく必要があるし、できるだけという目標で意見交換会を行った。

意見交換会は、経済学部3学科の学科長(伊藤経済学科長・山本経営学科長・大久保地域創生学科長)から、それぞれの学科での取り組みについて報告してもらい、それをうけての意見交換というスタイルでおこなった。

意見交換の中心は新入生ゼミナールで、主として経済学科、経営学科の経験が話された。この2学科については、読む・書く・話す能力を学生に身につけさせるという、発足当初よりの目標に沿って、各教員がそれぞれに実践しているものの交流が行われた。地域創生学科での取り組みは、ある程度この目標を共有しつつも、ここから一步抜け出して、4年生までの演習カリキュラムと密接に結びつけられ、学科独自の課題に沿ったシステマティックなカリキュラムとなっている、という印象であった。経済学部全体の取り組みとして考えていくという点では、1つの乗り越えるべき課題が示されているようにも思われる。

新入生ゼミナール以外の取り組みについては、経済学科の取り組みとして、教員による学生ケアを手厚くする一環として、1年生後期に入門ゼミを開始したこと、経営学科の取り組みとして、(初年次教育ということではないが)2年次の基礎演習で企業経営者と学生が意見を交わす企画を予定していることが報告された。

意見交換会全体の進行は、各学科長からの報告が、時間をかけた詳しいものであったということもあり、意見交換が大いに熱気を帯びるところまでは至らなかった。だが今後さらに議論を行っていく出発点は築けたのではないかと思われる。

教育開発センター員 加藤 一弘(経済学部准教授)

福祉社会学部特別公開授業・意見交換会報告

特別公開授業

公開日：平成20年10月28日(火) 5限

科目：乳児保育

担当者：前原寛(福祉社会学部准教授)

教室：8号館8331教室

意見交換会

日時：平成20年10月28日(火) 6限

場所：8号館8331教室

テーマ：視点

「免許・資格課程必修科目における学びの確保と向上に向けて」

- 免許・資格課程必修科目の位置づけ(カリキュラム・特色等)
- (免許・資格課程必修科目)受講生の実態(状況・ニーズ等)
- (免許・資格課程必修科目)担当者としての授業づくり(配慮・工夫)
- その他

当日の授業内容は、「長期間の保育を支える保育園文化」であり、保育園生活の特質を家庭生活と比較して論じたところである。

授業全体の流れは次の通りである。①最初に「今日のテーマ」を板書。同時に参考資料の明示 ②参考プリントと授業内レポートの配布 ③スクリーンによる出席確認(代返防止のため教員が行う) ④本題 ⑤授業内レポートの作成と提出

時間配分は、①②③で10~15分、④が60~65分、⑤が10~15分程度である。公開授業当日は、続けて学部意見交換会が予定されていたので、若干早めのペースで進行した。その理由は、授業内レポートにある。学生に対して授業の終了時に、A5一枚のレポート提出を毎回求めている。これは感想ではなく、授業内容についての理解を文章化するもので、「学び直し」を意図している。その理由から授業内レポートという名称を使用している。授業内レポートは、0~4の5段階で評価して次回に返却。12回の提出で総計48点になる。それが学生の持ち点となる。試験の52点と合わせて総合評価となる。

このように授業内レポートは単位に直結するので、学生によってはかなり時間をかけて作成する者もいる。そのため当日は、学部意見交換会との兼ね合いもあり、早めの進行にしたのである。

授業実践報告

公開授業をしたのは「乳児保育」。児童学科2年次開講科目で、履修登録数は137名。保育士資格必修である。

私の授業スタイルに格別目新しいものはなく、教科書、配付資料、黒板を用いて内容を展開している。強いて特徴を挙げればこの授業内レポートかもしれない。授業参観していただいた方々から、「学生が静かであった」「よくノートを取っていた」という発言をいただいたが、その理由の一つに授業内レポートがあると思われる。

当日は、予想より多くの方に参加していただき、多くの貴重な意見を賜った。この場を借りて、改めてお礼を申し上げたい。

〔文：前原（原文のまま）〕

意見交換会

今（平成20）年度、本学部における意見交換会は、同日実施の特別公開授業（前原先生「乳児保育」）と接続させて実施する企画とした。形態的には、授業参観者による代表発言をとおいてのミニシンポジウムとし、特別公開授業に対する意見交換のみに終えるのではなく、テーマ「免許・資格課程必修科目における学びの確保と向上に向けて」をめぐっての討論を展開したいと考えた。なお、本会は次のとおり実施した。

意見交換・討論報告

最初の国会趣旨説明の後、教育開発センター職員より、意見交換・討論への導入話題として「福祉社会学部授業アンケート結果（概要）」について説明された。

次に、授業担当者を含む6名の代表者から出された発言を要約すると次のようになる。

- 概して、受講状態が大変良好であったこと。
- 「授業内レポート」により、受講生自身の復習確保が図られるということ。
- 資格課程の必修科目であることから、却って、受講生の学

習意識が高いのではないか。

引き続いてのフリー討論では、①「授業内レポート」の効果について、②講義1回分の範囲・内容量設定について、③国家資格取得に見合う専門性養成について、を主な論点とし、その他、視聴覚教材の活用法や授業中の受講態度指導等をめぐり幅広い意見交換がなされた。

閉会あいさつとして、高木福祉社会学部長より労いと励ましの言葉をいただき、また、各自、今回の討論等内容を日々の授業実践等に生かすことを確認し、無事、本会を終えることができた。

最後に、授業参観および意見交換会を通し筆者自身の抱いた所感を挙げておきたい。

- 保育士養成課程における必修科目であって、2年生を中心とする大人数授業であったが、受講状況としてとても落ち着いた感じであったことが印象に残った。
- 本時テーマが明確で、全体的に、意図の分かりやすい授業展開であったこと、特に、内容・話題がテキストに準じて構成されており、受講生にとって、事後の自己復習がしやすいように思われた。
- 今回、特に、1回分の講義範囲・内容量の見積もりや「授業内レポート」による自己復習の点から、自分の授業実践においても、受講生自身の確かな学びを確保するための工夫が必要であると痛感した。

末筆ながら、今回、本会の活性化のため、授業参観登録者に対し代表発言を急遽依頼する等、ご無理をお願いすることが多々あったが、どなたにも快くお引き受けいただき、本当に感謝の念に耐えない。記して、心よりお礼申し上げる次第である。

教育開発センター員 岩井 浩英（福祉社会学部准教授）

国際文化学部特別公開授業・意見交換会報告

特別公開授業

- *科目 社会学
- *担当者 山田晋（国際文化学部教授）
- *公開日 2008年11月6日（木）2限

国際文化学部では、これまでシンポジウム形式の意見交換会を実施してきたが、今年度は、趣向を変えて特別公開授業後に当該授業についての意見交換会を実施した。

さて、今年度の特別公開授業は、言語コミュニケーション学科の山田晋先生にお願いした。11月6日2時限、公開授業当日の講義のテーマは「ジェンダーって何?:女と男について考えよう」であった。

先生の講義を拝見して、「私には真似できない」と思ったのは、先生の語り口だ。日本には「良薬口に苦し」という諺があるが、いくらい話、刺激的な話でも、やはり耳に心地よいほうが、話の中身を理解しやすいだろう。先生の語り口はフレンドリーでありながら、適度な距離感が保たれている。ある時は学生の同意を誘い、ある時には学生に問いかけ、講義のテーマの核心へと学生を導いてゆく。

また、学生諸君が座る位置にも驚いた。20名程度の受講者全員が前から座り、しかも教壇を囲む輪になるように各自が机の位置を微妙に変えているのである。後でうかがった所、学期初めに、受講者にこのようなレイアウトの趣旨を説明すれば、毎回受講者が

自主的に机を移動してくれるとのこと。確かにこれだと、受講者側もほぼ全員の姿を視野に収めながら先生の話聞き、発言できる。互いに適度な親密感と緊張感が維持できる。

講義はプリントに沿って行われたが、講義の展開は、受講生に向けられた「女と男どちらが徳か?」「自分が女(男)に生まれたからこそできた(できる)ことは?」といった質問によって組織づけられていたことも印象深い。これも講義を通じて受講生が「自分自身と向かい合って欲しい」という山田先生の狙いによるものであろう。それゆえ、授業の形態は講義形式と演習形式の折衷であった。この授業は、通常の講義にそのまま適用することは無理にせよ、一方通行になりがちな講義をより生き生きとしたものにするうえで、多くのヒントを提供してくれたものと考ええる。

意見交換会は同日の3時限に行った。通常授業が行われているにもかかわらず10名近い参加があった2時限の特別公開授業よりも参加者が少なかった。議論は「このような形式の講義ではどのような評価を行うか」「一般的には女性教員が担当する講義を男性教員が担当することの難しさとメリット」「議論の中で教員が想定していない反応を受講者がしめた時(往々にして、こういう瞬間が講義のテーマを掘り下げるために重要)の対応」などについて、山田先生を中心に話し合った。参加者全員が考え、疑問を交換できた点で、有意義な交換会であったと考えている。

教育開発センター員 飯田 伸二（国際文化学部教授）

FD 実践紹介

ジョイント型FDで授業は活性化したか

福祉社会学部非常勤講師 上園 征彦(附属鹿児島幼稚園園長)
福祉社会学部准教授 岩井 浩英(教育開発センター員)

岩井准教授(福祉社会学部)担当の「発達臨床」と筆者の担当する「教育臨床」とのジョイント型FDの実施は、今(平成20)年度で2年目になる。

ジョイントすることのきっかけは、大学の附属幼稚園である鹿児島幼稚園園長を務める筆者が岩井准教授の「総合講義「子ども学」」のなかで、幼稚園における子どもの発達や実態を現場からとらえて語る授業を一コマ持たせてもらっていて日ごろ幼児・児童の発達について語る機会も多かったことから、岩井准教授からはたらきかけによるものであった。一方、初めて大学の教壇に登る筆者にとっては、授業の計画段階からいろいろと助言をいただいております、さらに直接みてもらうことは、批評や修正をしてもらえることになり、是非とお願いしたところであった。幸い、乳・幼児を取り扱う「発達臨床」と児童期の問題を扱う「教育臨床」とは、子どもの成長・発達に伴って生じる問題であり、関連が極めて深いこと、併せて後期の木曜日の4・5限と二人の授業が連続していたことも好都合だった。

一年目の昨年度は、不慣れな筆者に対し岩井准教授は、スクリーンでの出席の取り方、マイクやビデオ・CDの扱いなどから教えなければならなかったし、授業展開や板書等にも気をつけてみていただいた。5限の「発達臨床」では、今度は岩井准教授が授業、筆者が参観し、学生と同じ目線で学ぶことになった。そして、5限終了後、研究室で授業の反省をし、気づいたことを忌憚なく話してもらった。

視点としては、

- 授業内容は、学生のニーズ・理解に沿っていたか。また、新しい用語や概念についての説明等は十分だったか。
- 授業で扱った事例は、テーマ・主題を深めるのに効果的であったか。
- 学生の学ぶ態度はどうであったか。

などであった。

その結果、指摘されたことは、

- 資料の量を精選すること。特に学生は、資料に空欄箇所がある場合、そこはきちんと説明・補充しないと不安がること。
- 資料に基づく展開を考え、導入に時間をかけすぎないこと。時間配分に気をつけないと結論・結びが弱くなったり、学生の授業レポートを記録する時間が無くなったりしがちのこと。
- 板書は、受講生が200名もいるので、後方からも良く見えるように文字の大きさに気をつけること。

などであった。

当初は、こうした基本的な指摘も多かったが、毎週の意見交換は、とても刺激的で次時からの授業内容の見直しにつながった。次第に双方の授業内容を関連付けて取り上げるなど、徐々に相互の授業内容がわかり合うことによる効果も生まれた。特に、二人の授業が子どもの成長・発達の上で連続的・発展的な関係にあることから、「子ども観」「発達観」を論議・共有したり、問題事例に対してのアセスメントから援助のあり方や療法等を検討したりでき、非常に有意義であった。

本年度は、二人のジョイント型FDも2年目に入り、シラバスをつくる段階で、内容の検討を行ったり、評価の内容・方法を明確にしたりして、昨年度よりは後期の始まる前に授業の心構えができたように思う。本年度も、5限終了後の検討会を設定しているが、筆者においては、教育的支援としてのカウンセリングと教育福祉的支援としての学校ソーシャルワークの接点・重なりを考えるにつれ、学校ソーシャルワークの研究会*にも出席し、子どもを取り巻く様々な問題を多面的にとらえる



機会にもなっている。併せて、研究者としての学問的追究の姿勢・在り方をも学び、この二つの授業のジョイントの効果は大きいと言えるのではなからうか。

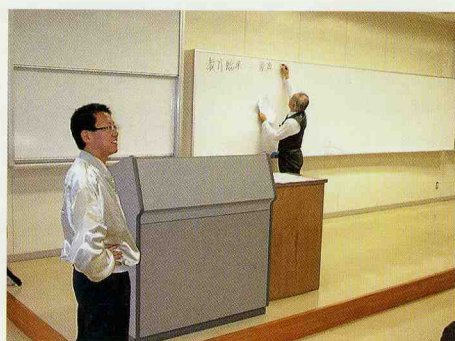
※「かごしま学校ソーシャルワークを進める会」

… 鹿児島県が平成19年度に文部科学省新規事業の指定を受けて以来、地元のSSW推進に向けて、2008年7月14日、県内SSW事業の実施に対する後方支援型団体として立ち上げられた。(上園)

追伸

昨年度同様、筆者の担当科目「発達臨床」とのジョイント型FDとして毎回の相互参観・意見交換をさせていただいているが、各授業の特色化や授業実施上の安定化という観点からみて、やはり、その利益はとても大きく思われる(例えば、内容(話題)重複の回避や相互の関連づけ、教材プリント作成・視聴覚教材使用上の工夫、他)。

今のところ、次年度もジョイント型FDのさらなる展開(3年目)を期しており、相互の授業参観回数は減らしながらも、各講義内容の根拠等検討を行うべく、積極的な意見交換等を予定している。いずれ、稿を改めてご報告したい。(岩井)



FD 研修参加報告

「主体的な学び」の陥穽——大学教育学会課題研究集会報告

教育開発センターWGメンバー 小林 潤司(国際文化学部教授)

「カカア天下」と「空風」は上州の専売かと思ったら、「備前の空風」というのもあるそうだ。師走の岡山は中国山地から吹き降ろす寒風が身にしみて、とにかく寒かった。

12月6日から2日間、岡山大学で開催された大学教育学会課題研究集会の統一テーマは「学生の主体的な学びを広げるために」。いずれも長時間にわたる、全体シンポジウム1つと4つの分科会(パネルディスカッション)が行われたが、私は、統一テーマと同じテーマで行われた全体シンポジウムを特に興味深く聞いた。

「ティーチングからラーニングへ」や「主体的(あるいは自律的)な学習」は、最近の流行語のようにになっているが、ティーチングを放棄して、主体的なラーニングがひとりでに生じるはずがないから、そのようなラーニングへと学生を向かわせるようなティーチングの中身と方法を考えなければならないというような結論になるだろうと予測していたら、やはりそのようになった。

もっとも新たに気づかされた問題もあった。ひとつは、「主体的な学び」ということばの字面の意味に欺かれていわゆる「能動的学習(active learning)」の授業形態に固執すると、思わぬ落とし穴に陥ることもあるということである。座学型の講義であっ

ても「深い学び」(松下佳代教授によると「知識の原理的な理解にもとづいてなされ知識の組み換えや幅広い適応を可能にするような学習」)を実現するような授業もありえるし、逆に調査、討論、発表などに取り組みせる授業でも、「深い学び」にまで学生を導くことができないケースもありうる。単純な〇×式の発想で考えてはいけないということだ。

また、評価の問題もある。学習意欲や主体性、自律性を公平に評価することができるのか、仮にできるとしてもそれは得策なのか? 報告者の中に、自分の名前を麗々しく冠した、自律的学習を促進する授業メソッドを考案し実践しているという某教授がいた。教授の魅力的な実践報告に私を含めて満場の聴衆が深い感銘を受けたのだが、最後の最後で、その授業を受講しているというフロアの学生の発言に会場がどよめいた。その学生いわく、「先生は学生たちの長所と短所をきっちり指摘してくれるので、とても信頼しています。でも、私を含めて多くの学生が先生の授業を取っているのは、それが楽勝科目で単位がとりやすいからです」。悪意からではなく、アンデルセンの王様を囁し立てたこどもたちと同じ無邪気さで放たれた痛烈なことばに対して、先生のコメントはなかった。

第4回「龍谷大学FDフォーラム」

教育開発センター副センター長 佐野 正彦(福祉社会学部教授)

12月13日(土)開催された本フォーラムはII部構成になっており、第I部では二本の「基調講演」が行われ、これを受けて第II部では、龍谷大学側から二人のシンポジストを出して、計4人のシンポジストにより「シンポジウム」が行われた。

第I部の基調講演は、①沖裕貴(立命館大学教育開発機構教授)「学士課程の体系化に向けて」と、②高瀬恵次(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室長)「愛媛大学の全学的挑戦—ディプロマポリシー/カリキュラムポリシー/アドミッションポリシーの策定と一貫性の構築—」であった。

①の沖先生の講演については細部について理解が及ばないところもあったが、〈学士力〉を測定する基準として「知識・理解」、コミュニケーション・スキルや数量的スキルなどの「汎用的技能」、自己管理能力やチームワーク、リーダーシップといった「態度・志向性」を多少〈力技〉的に位置づけていたことが理解できた。この点は今後の本学の方向性を考えると、有意義だった。また、高等教育の質保証の方向性として、「学士課程の学習成果」にかんして、各専攻分野を通じて培う〈学士力〉を中核とすること。ディシプリン明確な学部・学科についてはカリキュラムを〈国際的標準規格〉に置くこと。学士課程の学習成果にかんしては、個々の大学の個性化・特色化を尊重し、それぞれの大学の〈人

材養成像〉にそって保証すること。……等々の説明があり、〈本学的観点〉から何を取舍選択し、何を応用すればいいのか……等々を考えながら拝聴できた。

②の高瀬先生の講演は、愛媛大学の「ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシー」をどのように組織的に作り上げてきたかを説明するもので、非常に興味深いものだった。とりわけ、〈強制しない〉姿勢、授業内容とシラバスの中身のチェック、学生の身になった授業改善……等々のFDのルーティンが、ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシーとどのように関わり合うのかを意識したやり方はとても新鮮だった。

第II部のシンポジウムは上記の2人の講演者に加え、龍谷大学から林久夫氏(龍谷大学理工学部教授)と長谷川岳史氏(龍谷大学文学部准教授)がシンポジストとして登壇し、松本和一郎氏(龍谷大学教育開発センター長)を総合司会に執り行われた。それぞれの学部の事情を背景にして興味深いものであった。とりわけ、リベラル・アーツの志向が強い〈文学部の事情〉と専門的志向の強い〈理工学部の事情〉の対比は興味深いもので、本学でも「学部ごとのFD」を考える際の着眼点をもらったように思う。

初年次教育学会 第一回大会

教育開発センター副センター長 佐野 正彦(福祉社会学部教授)

2008(平成20)年3月11日(火)、同志社大学で開かれた「初年次教育学会」設立総会への参加に続いて、「第一回大会」(玉川大学、11/29[土]および11/30[日])に参加してきた。

ちなみに、本学会の目的は次の「設立趣旨書」の記述部分によくあらわれているだろう。少々長くなるが引用しておこう。「……国内外の諸状況の変化を背景に、日本でも初年次教育は急速な拡がりを見せ始め、研究者による研究の成果や担当教職員による効果的なプログラムの構築が増加しています。しかし、まだまだ日本での実践や研究実績の蓄積とそれらの共有は十分とはいえ、実践的な教育内容や効果的な教育方法の開発や改善に加え、初年次教育の教育効果の測定や理論的な説明をはかり、初年次教育のもつ重要性を日本の高等教育界に定着させていく必要が高まっています」。

さて、第一日目は2つのワークショップに参加した。1つは菊池重雄氏(玉川大学)が担当した「ワークショップI-D」である。ここでは、「実行性・実効性のある初年次教育を実現する」と題されたもので、なかなか刺激的なものであった。

それは、開講に当たりまずは隣席同士で自己紹介することから始まった。私たちは隣の人と型どおりの名刺交換をして授業に臨んだが、ここに1つの仕掛けがあった。つまり、通常の名刺交換で済ませたのであるが、それで私たちはお互いにフルネームを言い得るだろうか。答えは否である。もしもこのときに名前の由来とか何か特徴的な話を挟んでいけば、より容易にフルネームを記憶できたかもしれない。ちょっとした工夫はやはりコンプレックスの卵であり、理解しやすい教育につながるということだろう。その後、2人ないし4人を単位にして、初年次教育に消極的な教員をどのように誘導するか、初年次教育の阻害要因は何かについて議論があった。こうした一連の作業過程は、個人で考えているだけでは気づかない視界の狭さを喚起してくれた。

2つめは、沖清豪氏(早稲田大学)が担当者となった「ワークショップII-D」である。テーマは「大規模・研究志向・人文系学部における「基礎演習」の設計と実践」である。

ここでは、4人前後の人員で班編制を行い、「早稲田大学の文化構想学部・文学部に初年次教育を導入するために何をすれば

いいか」というテーマで議論し合った。そもそも早稲田に初年次教育は必要か?という疑義はあるが、どの大学でも専門に閉じこもろうとする研究者の習癖には共通性があり、この点を確認できたことは貴重な経験だった。

第二日目は「ラウンドテーブル」と「自由報告発表」に参加した。飛行機の時間の問題があって「自由報告発表」を途中で切り上げることになったが、第一日目に劣らず興味深いものであった。

まず小島佐恵子氏(北里大学)が企画し、司会も兼ねた「ラウンドテーブルD:初年次教育の効果をどのように測るか—量的・質的アプローチの現状と課題—」に参加した。ここでは初年次教育の効果を量的・質的に測定することがテーマになっていたが、なかなか焦点が定まらず混沌とした報告になっていたように思う。私自身の理解力に限界があるのが大前提だが、初年次教育に限らず教育効果を評価・測定するのは、言うほど容易なことではないということだろう。

笹金光徳氏(高千穂大学)が司会を務める「自由報告発表3」の4つの報告のうち2本の報告を拝聴した。森朋子氏(島根大学)・山田剛史氏(島根大学)の両先生による「初年次教育の効果を検証する—授業デザインの差異に着目して」と題された報告である。この報告は、主に質的測定を企図したものであり、いわゆるエスノグラフィ(民族誌)的記述を通じたとてもよく練られたやり方のように感じた。ただ、質的研究に共通することだが、どうしても〈個人技〉的要素が強く一般化しにくいように感じた。

次に絹川直良氏(文京学院大学)・森宮勝子氏(文京学院大学)の両先生による「文京学院大学におけるポートフォリオ導入」は、文京学院大学に「ポートフォリオ」を導入した事例報告である。入学から卒業に至る流れを「カード型式」で多面的に捉えていくとするものである。この「カード型式」というのが「ポートフォリオ」ということなのだろうが、今一この概念が消化不良のまま使われていたように思う。この概念は初年次教育学会において今後しばらくのあいだ注目されることになるだろう。

■ホームページ紹介

当センターの活動状況、企画案内等をホームページで公開していますのでご覧ください。

教育開発センターのHPアドレス <http://www.iuk.ac.jp/~kaihatsu/>



鹿児島国際大学教育開発センター

〒891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 TEL: 099-263-0838 FAX: 099-263-0640
e-mail: kaihatsu@ofc.iuk.ac.jp <http://www.iuk.ac.jp/~kaihatsu/>